

# 和歌山縣那賀郡に於ける地之調査報告

## 和歌山測候所

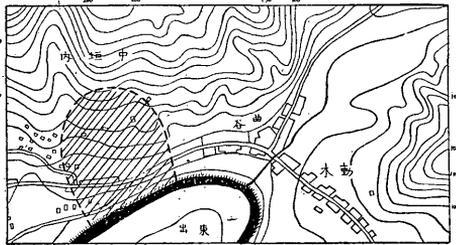
和歌山縣那賀郡東野上町及び南野上村に於ける地之は隨分古くからの現象で、當所に於ては既に大正十三年以來度々調査を行つて居るが、今其の狀況を概記すれば大要次の通りである。

### 東野上町の地之

一、地之の場所 和歌山縣の西北部を東西に走る梨子の木山脈に屬する八幡山（二三二米）、長峰山脈に屬する經塚山（二九一米）とが南北相對峙する間を紀ノ川の支流たる野上川は谷を穿つて貫流して居る。地之の場所は此の川の北岸洪積段丘の一部に相當する東野上町大字動木小字小畑である。

二、地之の狀況 急峻なる山腹を開墾して、階段狀田畑に化したもので、地之の區域は東西約二百五十米、南北約三百米の小範圍である（第一圖及び口繪寫真第一圖參照）變動の著しき所は約二十年間に一米餘の滑落を見て居るが、此の區域全體として土地の傾斜面に沿うて下方の谷に向つて沁り落ちつゝある

第一圖 東野上町地之地域圖



凡例  
地之地域  
等高線は  
十米毎

じ、戸障子の立て付けが悪くなり、數年毎に土臺を上げ、柱を引き起さねばならない。

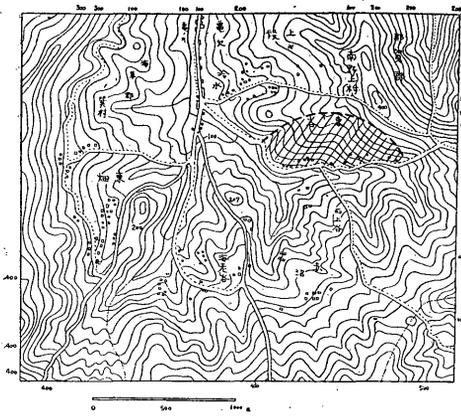
ものである。（口繪寫真第二圖、第三圖參照）而して水田の如きは三、四年目毎に地均しを施し漸く水平を保つ様に工夫せられ、又之等の階段狀田畑の下部に相當する、野上川河岸の小畑の人家は、一般に土臺に狂ひを生

又此の附近に於ける井戸は地變のため楕圓形となり、或は瓢

形となつたものが多い。而して此の地方の地之りは明治二十二年八月十九日の大豪雨以來のことで、現今に於ても豪雨の後は下り方が激しい様である。

猶ほ前記小畑の外、同地の北東約二軒に相當する廣尾谷に於ても兩側の山頂や山腹に於て小規模の地之りがあり、同地（東野上町大字動木小字小畑）の廣尾專一氏の宅地内は、同家の家人の談に依り見かけの滑落を測定した處、約六十年間に二米餘、最近十年間に六十厘餘に落ちて居ることが判明した。（口繪寫

第二圖 那賀郡南野上村附近地之り地域圖



眞第四圖參照)

### 南野上村の地之り

三、地之りの場所

前記小畑の南西約四軒半に相當する、長峰山脈の白髮畑峠(五二九米)長峰峠(五二〇米)の南側傾斜面、龜ノ川水源地たる南野上の諸部落にも

地之りがある。(第二圖參照)

四、地之りの狀況 一般に極めて小規模の且つ緩慢なる地之りであるが、其の中にて稍著しきは南野上村大字東上谷である。同

地は龜ノ川の谷に沿ふ急峻なる傾斜地で、地之りの區域は東西約一軒、南北三百米位の範圍である。山腹を開墾して階段狀に田畑を作り或は宅地を拵らへたもので、人家は傾斜を生じ、數年目毎に修繕を要し、又水田も時々地均をして漸く水平を保つ様に工夫せられて居ることは前記小畑と同様である。又、藪、水田の畦等が一米餘もにり落ちた跡が所々に残つて居る、而して此の地方の地之りは極めて緩慢で昔から繼續的に進行して居るらしく、現今八十歳の古老も其の始まりを知らぬと云つて居る。

又豪雨の後は變動の度が矢張り激しいと云ふことである。其他附近の冷水、西上谷、赤沼、海老谷、東畑の諸部落に於ても、田畑、藪等が極めて輕微な地之り起して居る。又同地方の地之りは相當古くから起つて居るものらしく、赤沼、海老谷、龜の缺け等の地名が存することも之等に關するものならんかと思はれる。

五、原因考察 此の地方の地之りを特に潜動と稱し、和歌山附近の頻發地震或は所謂槇尾斷層線等と結びつけ、地塊運動に基因するもの、如く説く向もあるが、地塊運動か否かを判別する

には、猶ほ充分なる調査と精密なる観測結果に俟たねばならぬと思ふ。

而して此の地方の地層は主として輝岩を以て構成せられ、

所々に蛇紋岩を交へて居るが、一般に岩石の腐蝕の度が著しい。  
（口繪寫真第五圖及第六圖参照）又地變の區域は急傾斜せる山腹面に階段狀に水田又は畑が作られて居ることに注目せねばならない。以上の様な地形や地層構造の場所に地之の起ることは敢て珍らしいことではなく、寧ろ當然のことであらう。又里人が土地肥沃なりと稱する場所が殊に地之の度が激しい、之れは土壤の深さと地之との密接なる關係を物語るものであらう。其他水田を畑に化した爲め地之の度が減じたことと云ふこと、豪雨の後に地之の度が著しくなる傾向があることは、水分の供給と地之との關係の密接なることを現はすものであらう。

今一つは一地方に群を爲して地之の現れて居ることは、地殼構造即ち同種類の岩石が分布せられ、且つ腐蝕度が略同一程度に進行して居る爲めで、格別怪しむに足らないことであらう。

要するに此の地方の地變は單に一局部に起る地盤の剝落現象であつて、從來各地に於ける地之と其の機巧は全く同一であらう。即ち地盤の腐蝕が最大原因で、水分の供給と地形の急傾斜

は地之りを促進せしめたものと考へるのが最も適當であらう。

（昭和八年五月三十日）